

氏 名（本 籍）	劉 鵬（中国） <small>りゅう ほう</small>
学 位 の 種 類	博士（国際文化学）
学 位 記 番 号	甲 国第 11 号
学位授与年月日	令和 2 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
論 文 題 目	ジャック・ロンドンの中国人観の変化 一彼の中国もの作品から読み取る
論 文 審 査 委 員	主査 森 孝晴 教授 博士（国際文化学）鹿児島国際大学 副査 戦 慶勝 教授 博士（国際文化学）鹿児島国際大学 副査 外 蘭 幸一 鹿児島国際大学名誉教授 博士（文学）九州大学

内容の要旨

本論文は、アメリカの自然主義作家ジャック・ロンドン（1876－1916）の中国人に対する認識が彼の人生の出来事や訪れた場所や進み方によってどのように変化し、どのような方向性をもっていたかを、中国もの作品群から見ることにより実証的に検証したものである。全 9 章から成り立っている。

なお、枚数は 150 枚に達しており、総字数は課程博士学位請求論文の字数基準を大幅に超えている。

以下、各章ごとに要旨を述べる。

第 1 章 ロンドンの生涯

筆者はロンドンの作品がその実人生の流れに沿って書かれている部分が多く、彼の偏見もまたそれに従って変化していると推論して、生涯を見直していった。事実ロンドンの中国もの作品群はロンドンの人生に関わりその流れに沿って書かれていったことを提起した。

第 2 章 ロンドンの中国もの作品執筆の背景について

第 1 章を受けて、ロンドンの中国もの作品が 1907 年頃を境に大きく変化していくことを編年的に跡づけた。”White and Yellow” から始まり”The Chinago” などを経て”The Tears of Ah Kim” までの作品が実在の人物に取材したり、ロンドン自身の職業的経験に基づいていることを明らかにした。

第3章 ジャック・ロンドンの創作初期の中国人観について

ロンドンが最初期に執筆した作品を分析し、当時のロンドンの状況や社会背景を関わらせて、最初期のロンドン是一般のアメリカ人の持つ中国人観しかもっていなかったこと、すなわちあまり彼らの実質には関心がなく、ただ強い偏見にとらわれていたことを実証した。

第4章 ジャック・ロンドンの黄禍論—黄禍論の歴史に関わって

ロンドンの差別意識は、当時世界で広まりつつあった黄禍論に影響を受けて、最高潮を迎えた。日露戦争の取材は、ロンドンに中国人や日本人に対する強い偏見を与える効果をもたらして最も差別意識を押し出した作品を書かせ、その名も「黄禍論」という激しい批判の論文も書かせた。しかし、この時の経験は数年のちには中国人への深い理解も意識させることになり、かなり異なった中国人脅威論を書かせた。そこには中国を実際に訪れそこに生きる中国人を実際に目にした効果が表れていた。筆者は各作品の細部や特徴を比較することによりこのことを実証した。

第5章 ロンドンが考えた日中関係と実際の日中関係

ロndonは日本人と中国人を民族的な同質性が高いと考えていたが、実はそうではないことを指摘し、人生の半ばではロンドンの認識がまだ甘かったことを明らかにした。

第6章 “The Chinago” から見るジャック・ロンドンの中国人観の変化

この作品を執筆したころからロンドンの中国人に対する偏見がついに漸減という変化を始める。そこには彼が中国や中国文化をかなり深く研究している姿が浮き彫りとなり、白人の差別を批判し中国人に同情しているとも言えるような描写が出てくる、ということをも指摘した。

第7章 “Chun Ah Chun” から見るジャック・ロンドンの中国人観の変化

この小説の中には今までロndonは描けなかった中国人像、すなわち中国人商人が現れたことを指摘したうえで、作品に書かれる家庭問題、つまり生活習慣や結婚をめぐる問題を、金銭にまみれたアメリカ社会に対する風刺であると看破した。

第8章 “The Yellow Peril” と “If Japan Wakens China” から見るロンドンのアジア人観とりわけ中国人観の変化

この両作品（エッセイ）は中国人や日本人を大きな脅威ととらえている点で共通しているが、両作品が書かれた年は5年隔たっている。この間に大きな変化があり、後者では口調が変わって断定を避けるようになり、冷静さが見て取れ、優生学的な

表現が姿を消すことになった。筆者はこれも詳しく分析し、ロンドンの偏見が低減していく証拠だとみる。

第9章 “The Tears of Ah Kim” から見るジャック・ロンドンの最後の中国人観

中国ものとしては最後の作品を分析し、ここに至ってロンドンの偏見は全く見られなくなると筆者は断定する。その理由は、彼が中国文化をかなりの程度で理解し、とりわけ漢字の意味まで理解し、中国の道德の基本さえも押さえていたからだと説明した。

審査結果の要旨

1、評価

この論文は、アメリカの自然主義作家ジャック・ロンドンの人生の軌跡に沿って彼のいわゆる中国もの作品群を読み分析していくと、そこにはロンドンの中国や特に中国人に対する差別意識・偏見の変化が明確にみられ、その変化には彼の中国人に対する偏見の消滅へと向かう方向性が存在することを実証したものである。

論文本体については、総ページ数は150ページにのぼり、全体の字数は課程博士請求論文の字数基準を大幅に超えている。提出された予備審査論文には査読付きの論文が2篇含まれているので、論文提出要件を満たしていると認められる。

その研究手法は、まずロンドンの中国もの作品や関連するエッセイを丹念に読み込み、それぞれの作品の登場人物のモデルを特定したり、中国文化や思想との整合性を調べたりすることにより、ロンドンがいかに関心を持って中国のことを知っていたかを明らかにした。そのうえで、ロンドンの中国人に対する偏見が彼の執筆人生の中で変化し姿を消していったことを実証したものである。本論文の見解には、中国をよく知る者によって書かれたことによる説得力があり、そこに本論文の独創性が見られる。

第1章から第9章までの議論の文学研究上の意義は次のようにまとめられる。

①ロンドンの人生を再検証することにより、中国もの小説を執筆した彼の動機や背景が明らかになり、事実確認が行われた。この結果、ロンドンが実在の人物に取材したり、記者として派遣されたりするなどの実体験により作品にリアリティを獲得していたことがわかった。

②次に、ロンドンの創作初期の中国人観の確認が行われ、最初期の彼は当時の一般的なアメリカ人と同様の偏見に満ちた中国人観しかもっていなかったことや、当時ちょうど世界で広まりつつあった黄禍論に影響を受けて彼の差別意識は頂点を迎えたことや、しかし、一方で中国人と日本人の民族的同質性が高いという認識だったことを確認した。

③そのうえで、ロンドンの中国ものの小説やエッセイを詳しく分析した。このことにより、彼の中国ものの作品の中にロンドンの中国・中国人理解の変化を明確に跡づけることに成功した。これらの分析は非常に微細である。

④これらの分析を通して、結論として、ロンドンの中国・中国人観の変化が明らかになった。すなわち、偏見渦巻く時代と生活環境の中にあっても、ロンドン自身の旅の経験の中で実際に見聞したことにより自分の中国人に対する偏見や差別意識の変化をもたらしたのである。

なお、このような研究が学会誌にも認められたことは、本論文がロンドンの精神的道程に関する新視点を提示しえた証であり、国際的なロンドン研究の中でも新たな分野を開拓したと言っても過言ではない。

2、結論

まず、この論文が中国を知る者でなければ書くのは困難な内容と質を持っていることを確認したい。本国アメリカのロンドン研究においても、アジアとロンドンの関係や彼の人種偏見に関する客観的な検討はまだ始まったばかりであり、ロンドンの中国人観に関する初の本格的な研究だとも言えよう。日本とロンドンの関係の研究は近年日本で進みつつあるので、併せるとロンドンとアジアの関係に関する研究が飛躍的に進み、本国アメリカでも注目されることになるものと思われる。

中国をよく知る研究者によって、他の者にはなかなかできない切り込み方ができた。儒教や中国文化、そして「瞑想と休憩の庭」や「親孝行」といった中国人の生活上の精神文化など、筆者でなければ気が付かない多くのポイントを提示して、さらにロンドンが多くの本などを読んで情報収集をしていたことを明らかにして、いかにロンドンが中国のことを調べ学んで知っていたかを実証した。

口頭試問でも「着眼点がいい」「説得力がある」などの評価をいただいたとおり、ロンドンが多く中国ものの小説を書いていたことに着眼し、その作品群を詳細に読み緻密に分析したうえで実在の人物や資料を探してその存在を明らかにし、それらが作品に密接に関わっていることを実証していった。この発想と地道な検証の努力は高く評価されるべきである。

また、ロンドンの偏見や差別意識の編年的変化を日露戦争の従軍経験やスナーク号の旅といったロンドンの実際の人生の軌跡に沿って調べることによって追跡し鮮やかに活写した。このことにより、ロンドン研究者の中である程度話題になり始めていた彼の偏見の変化がまさに中国ものの作品の変化の中に明確、かつ象徴的に表れていたことを実証した。

なお、中国語を母国語とする者がアメリカ文学についての博士論文を日本語で書くという困難な仕事に立ち向かった努力も評価したい。

以上のように本論文は、ロンドン研究に新たな地平を開く可能性を有する独創的な研究であり、実証の確度も非常に高い。よって、本論文は、その著者のロンドン研究者としての自立を保証するものであり、本論文の著者は博士（国際文化学）の学位を授与されるに十分に値すると認められる、と判断された。。